熊野の森から

怪しの熊野

其の七十一

「本宮町の怪異（其の一）熊野本宮大社①」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

田辺市本宮町は、新宮市の熊野速玉大社、那智勝浦町の熊野那智大社と合わせた熊野三山の一つ、熊野本宮大社がある宗教都市だ。熊野三山は神仏融合の聖地であり、平安時代になると「浄土への入り口」として多くの皇族や貴族が参詣するようになった。仏教での死を意味する浄土へ行って再び帰ってくる参詣であることから「よみがえり」の聖地として人々の信仰を集めた。当時の宗教としては珍しく、男女を問わず全ての人を受け入れたため、室町時代にもなると「蟻の熊野詣」に例えられるほど多くの人が訪れたという。熊野の神々は大らかなのである。

熊野本宮大社は、以前は熊野坐神社（くまのにますじんじゃ）と呼ばれていたが、大正四年に大社に昇格した。坐は座と同じ意味であり、熊野にいらっしゃる神をお祭りする神社ということになる。本宮大社の祭神は、熊野三山に共通する熊野十二所権現と呼ばれる十二柱の神々で、主祭神は家都美御子大神（けつみみこのおおかみ）である。樹木（自然）を支配する神であることから、素戔嗚尊（すさのおのみこと）と同神だとみられているが、素戔嗚尊の御子で植樹の神である五十猛命（いそたけるのみこと）だとする説もある。五十猛命は、和歌山市の伊太祁曽（いたきそ）神社の主祭神として知られる。

熊野遊記名勝図画に描かれた本宮大社（パブリックドメイン）

本宮大社の社地は、現在は山の麓にあるが、以前は熊野川の中州にあった。江戸時代までは橋がなく、支流の音無川に入り、足を濡らして渡ってお参りしたそうだ。清めの意味もあったようだ。旧社地は現在では大斎原（おおゆのはら）と呼ばれるが、明治二十二年の大水害の被害を受けたため、流失を逃れた上四社を明治二十四年に現在地へ移して再建した。東日本大震災の際、素戔嗚尊を祭る神社の多くが津波被害から逃れたことから、災害に対する先人の知識の確かさが注目された。しかし、素戔嗚尊を祭っているはずの大斎原は、明治二十二年に続き平成二十三年の水害の被害を受けることになる。この水害の前に、チベットの高僧を大斎原にお連れした友人から聞いた話であるが、この高僧は大斎原の地で涙を流され、ずっと瞑想（めいそう）されていたそうだ。質問すると「この地は定期的に水に洗われ、清められる。流失が前提となっている場所を聖地に選ばれた先人の自然との付き合い方への覚悟に感激した」と返ってきたという。大斎原に対するそんな解釈は聞いたことがないが、確かに、水辺に置かれた神社の中には浸水や流失を「清め」と位置づけているものがあり、もしも大斎原もそのひとつであったなら、それはそれで興味深い話だ。

ところで、神域の大斎原は、現在の社地に移された上四社と合わせて基本的に撮影禁止であることを添えておきたい。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。